

第25回日本気象学会夏期特別セミナー (2013年度気象・海洋夏の学校) の報告

2013年度気象・海洋若手会実行委員会*

1. はじめに

第25回日本気象学会夏期特別セミナー(2013年度気象・海洋夏の学校)は、2013年9月6日(金)から8日(日)までの2泊3日で、福島県の国立磐梯青少年交流の家において、東北大学が主幹校となって開催されました。この夏の学校は、全国の若手研究者がそれぞれの研究について議論を交わし視野を広げ、親睦を深めることを目的に毎年開催されている行事です。内容は招待講演、学生による口頭発表およびポスター発表、ならびに懇親会となっています。今回は、海洋若手会も東北大学が主幹校であったため、2009年度の東京大学以来2度目の気象海洋合同による夏の学校となりました。そのため、全国から約130名の参加がありました。気象と海洋それぞれの分野の方々と3日間を通じて交流することができ、非常に有意義なものとなりました。

2. 招待講演

今回は気象と海洋それぞれの分野から計5名の方に、研究者としての生き方から最新の研究まで、非常に幅広いテーマで講演していただきました。現在研究に励んでいる学生のみならず、これから研究に没頭していく学部生にとっても、今後の進路の参考になる有益な機会であったと思います。以下が講演者および講演要旨となります。

○稲飯洋一(京都大学生存圏研究所ミッション専攻研究員)

稲飯先生には、「空と観測のあいだに」と題し、これまでの研究成果は勿論、船舶や南極・昭和基地での

観測などご自身の経験を交えながら、研究者として生きていく魅力をご講演いただきました。博士課程進学後に何度も自信を喪失し、諦めそうになりながらも、毎晩撮り溜めしたビデオを観てモチベーションを上げて乗り越えたエピソードはほとんどの学生が共感したのではないかと思います。また、家庭菜園で育て巣立っていくテントウムシのように身近なところから観測・観察し、面白みを味わうことが自然科学者の第一歩であることをお話しされていました。

○杉本志織(北海道大学大学院地球環境科学研究院博士研究員)

杉本先生には、「チベット高原研究の魅力」と題し、現在のチベット研究に至るまでの紆余曲折をご自身の貴重な経験を交えてご講演いただきました。もともとチベットには興味はなく、当時の指導教員からの勧めで始めたものの、実際にそのチベットの地に赴いて自然の偉大さに圧倒され、感動したことをきっかけにチベット研究に本気で向き合うようになったお話が印象的でした。気さくな話し方で、学生からの質問も多く、気象の学生も、海洋の学生も得るものが多くあったのではないかと思います。

○岡 英太郎(東京大学大気海洋研究所准教授)

岡先生には、研究の話ではなく研究者として生きていく上で必要である、人との繋がり的重要性・挨拶の大切さについてご講演いただきました。ご自身の学部生・院生時代を振り返りながら、若いうちにしかできないことを積極的に、というすべての学生に共通する教えを説いていただきました。

○川村 宏(東北大学大学院理学研究科大気海洋変動観測研究センター教授)

川村先生には、「バルクからスキンへ、そして海面

* 代表: 福井 真(東北大学大学院理学研究科)

kaiyowakate@gmail.com

© 2014 日本気象学会



第1図 集合写真

へ」と題し、地球観測システムの急速な発達により、客観解析の品質が格段に向上し、数値モデルによる大気海洋変動予測精度が飛躍的に向上してきた一連の経緯についてご講演いただきました。そして、次の世代が担っていくべき役割や、現在深刻な問題になっている放射能汚染にまで論を展開され、全員が関心を持って聴講していました。

○岩崎俊樹（東北大学大学院理学研究科流体地球物理学講座教授）

岩崎先生には、「温位座標に基づく大気大循環～MIMの世界～」と題し、ご自身の学生生活のお話に始まり、現在に至るまでの研究内容について熱く語っていただきました。従来の等圧面上での大気大循環に対し、断熱保存量である温位を用いた自然な表現を示されていました。また、ご自身が開発されたMIM（等温位面上での質量加重付東西平均）に基づいた、大気微量成分の子午面輸送やエネルギー変換の解析など分かりやすくお話いただきました。多数の学生から質問が挙がり、時間を忘れるほど活発な議論がなされていたのも印象的でした。

3. 一般講演

夏の学校2日目の午前には、参加者自身が自分の研究成果を発表する一般講演を行いました。今回の発表件数は、口頭発表8件、ポスター発表21件と例年以上に多くの発表がなされただけでなく、その内容も多岐に渡っていました。また、質問が絶えず飛び交い、活



第2図 学生発表の様子

発な議論がなされていました。

4. 企画

若手研究者同士の親睦を深めるために、夜には懇親会を行いました。毎年恒例の研究室紹介では、2分程度という制約はありましたが、どの研究室も個性あふれる非常にハイレベルな紹介に、参加者一同大いに盛り上がりました。また、2日目の夜に開催された立食形式の懇親会では、食事をしながら多くの方と交流する機会が得られたと思います。懇親会の後も、講師の方も含めて気象と海洋の分野を越えた交流、熱い議論が夜遅くまで続きました。

5. おわりに

この度は、夏の学校にご参加いただいた皆様、また企画・運営にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。そして、本年度も日本気象学会から資金を援助していただきました。この場を借りて厚く感謝申し上げます。

2014年度の夏の学校は北海道大学に引き継ぐこととなります。次回の夏の学校も、これから入ってくる新たな若手研究員を含め、運営側と参加者双方にとって実りある機会になりますこと、研究者同士の親睦がさらに深まりますことを期待しております。